

熊本城 復興に向けて

〈2〉熊本城廃棄案と「御城拝見」

「肥後の維新は、明治三年に来ました」という徳富蘆花著『竹崎順子』(1923年)の有名な一節があります。江戸時代を通じて被災と修理を繰り返しながら維持された熊本城も、この時転機を迎えました。横井小楠の弟子の徳富一敬(蘆花の父)・竹崎律次郎が立案し、新たに熊本藩知事となった細川護久のもとで実行された藩政改革では、熊本城を廃棄する計画が持ち上がります。築城から250年余りを経て、戦闘が大砲を主とする方法に変わり、無用の長物となっていることや、維持管理にかかる多額の費用を省くことが主な理由です。明治3(1870)年9月5日に中央政府に城の廃棄を願い出て、許可を得ています。本丸御殿に置かれていた藩庁は、廃棄に向けて花畑屋敷に移され、同年冬には、一般庶民に城が公開されました。これは全国でも珍しい「御城拝見」の事例です。

では、当時の人々が見た熊本城はどのような姿だったのでしょうか。玉名郡江田村に住んだ五野栄八(保萬)という人の明治3年の日記(熊本市立図書館所蔵)には、次のようにあります。「12月18日、朝食後に熊本城内に入り、小天守の入口へ向うと、大勢の人で登ることもできない。ようやく登り、小天守の部屋を拝見する。大砲・小銃・大小の弓・兎・鎧・長刀・鎗・陣太鼓など、おびたしい備えだ。小天守に登り終わり、その後、大天守へ移動して部屋を見ながら最上階へ登り、四方の景色を眺めた。実に熊本領内は一目に見え、残らず見物した。」村に帰った栄八は「御城拝見」の土産話を話して聞かせます。その後、彼の話聞いた家族や村の若者が「御城拝見」に出発しているところを見ると、熊本城の公開という一大イベントを、多くの人々が楽しんだ様子が伝わってきます。

明治4(1871)年頃に撮影された写真には、当時の人々が見た熊本の風景が残っています。この写真は、大天守の最上階から南を写したのですが、櫓が建ち並ぶ城内の向こうに、広い庭を持つ花畑屋



▲五野栄八
「世変化止宿万記録簿」
(熊本市立図書館所蔵)



▲天守から南を望む(熊本市寄託)

敷、さらに遠くには雁回山が見えます。

さて、一度決まった熊本城の廃棄でしたが、結果的には実行されませんでした。明治6(1873)年の「廃城令」で、全国に340あった城・陣屋・要害は陸軍用地として利用する「存城」と、大蔵省の財産として民間に払い下げられる「廃城」に区別されます(森山 英一『明治維新 廃城一覽』1989年)。「存城」となったのは熊本城を含む44か所で、それ以外の城のほとんどが「廃城」となりました。「廃城」処分となった城の天守・櫓などの建物は安く売り出され、取り壊しが進みました。また、「存城」となった城も老朽化し、多額の修理費用がかかることから、そのまま放置されたり、建物の解体が行われることも少なくありませんでした。熊本城には明治4(1871)年に鎮西鎮台(のち熊本鎮台)が置かれ、陸軍が管理していくことになります。

(熊本城調査研究センター 木下 泰葉)